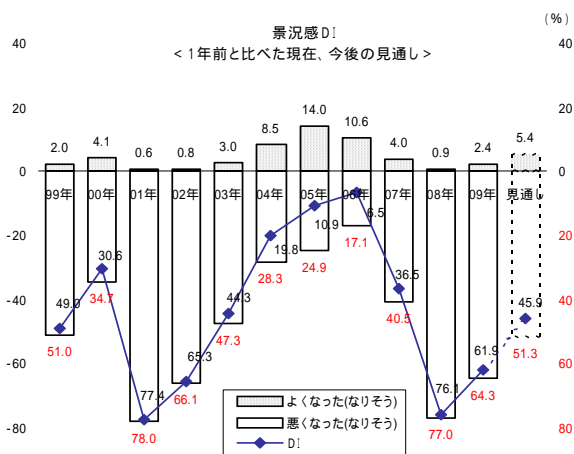


1. 景気・収入・支出・暮らし向きの動向

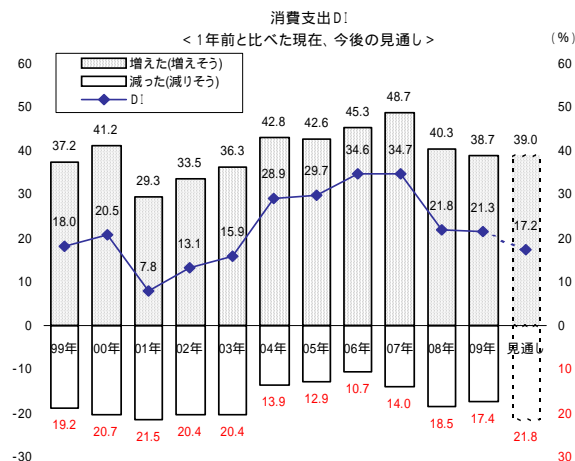
[景況感DI] 悪化傾向に歯止め

- ・景況感DI（1年前に比べ景気が「よくなった」という割合から「悪くなった」という割合を引いた数値）は、前回（08年調査）より14.2ポイント上昇し、61.9となった。
- ・今後の見通しは、さらに16.0ポイント上昇し45.9と、景況感の悪化に歯止めがかかっていることがうかがえる。



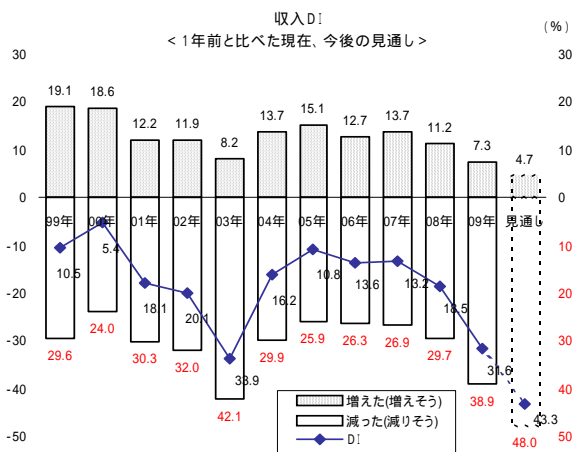
[消費支出DI] 生活防衛意識は依然根強い

- ・消費支出DIは、ほぼ横ばいの21.3となった。収入の減少に伴って抑制傾向が強まると思われたが、政府の消費刺激策が一定の下支えとなり、堅調に推移したようだ。
- ・今後の見通しは、4.1ポイント低下し17.2となった。消費者の生活防衛意識は依然根強いようだ。



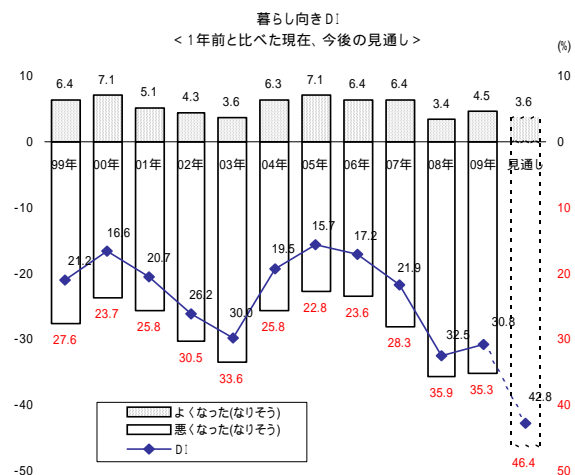
[収入DI] 前回調査より大幅悪化

- ・収入DIは、前回より13.1ポイント低下し31.6と悪化に転じた。
- ・今後の見通しは、さらに11.7ポイント低下し、43.3となった。収入が「減りそう」との回答も約半数に達し、所得環境に対する厳しい見方が大勢を占めている。



[暮らし向きDI] 今後の見通しは厳しい

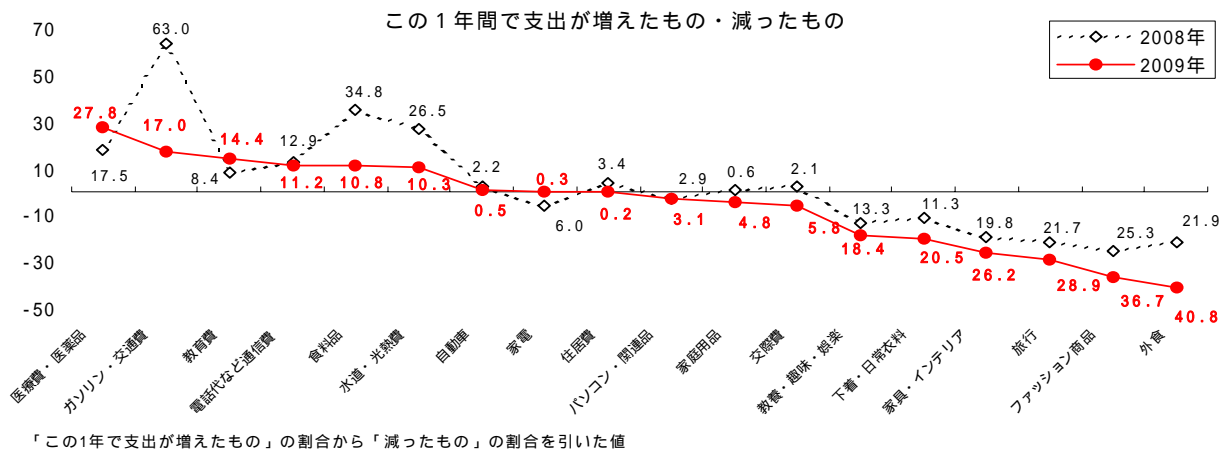
- ・暮らし向きDIは30.8で、調査開始以来最低水準となった前回よりは改善した。所得環境は厳しいものの、物価下落等で家計負担が軽減されたことなどが要因と推測される。
- ・今後の見通しは、12.0ポイント低下し42.8と、収入DIに連動して大幅悪化に転じた。



2. 費目別の支出動向

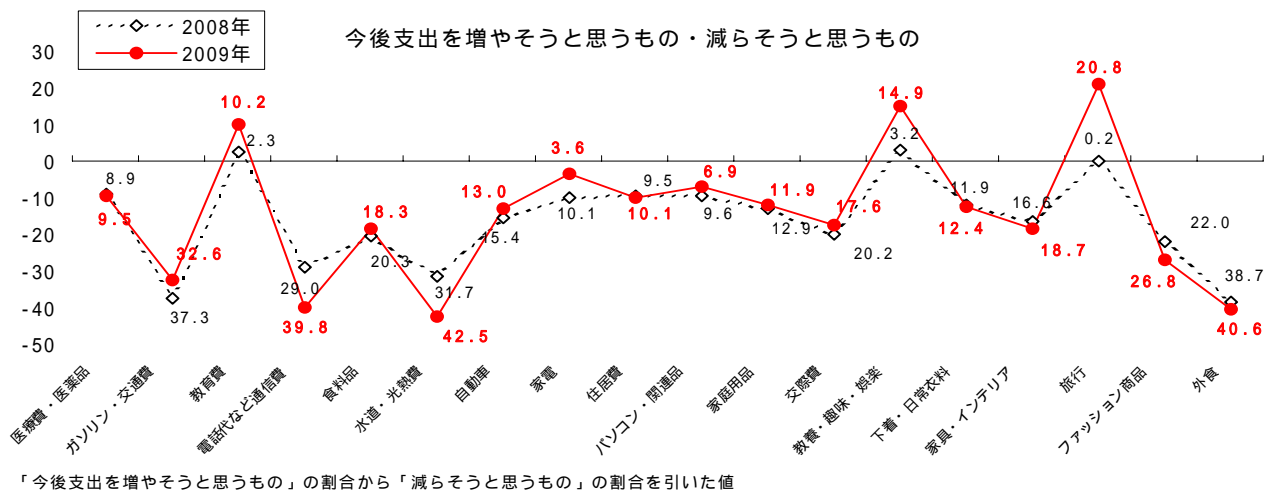
[この1年間で支出増減]

- ・ D I 値が最も高かった費目は「医療費・医薬品」(27.8)で、次いで「ガソリン・交通費」(17.0)、「教育費」(14.4)となった。新型インフルエンザの流行が影響し、「医療費・医薬品」のD I 値は上昇したようだ。一方、ガソリンや食料品などは、価格上昇が一服したことでD I 値は大幅に低下しており、物価面での家計への負担は軽減されたようだ。
- ・ しかし、D I 値が2桁マイナスとなった6費目は、いずれも調査開始以来最低水準で、「ファッション商品」や「外食」は、前回は10ポイント以上下回る大幅悪化となった。可処分所得の減少を受けて、消費者は選択的消費に関わる費目をさらに切り詰め、生活防衛を図っているようだ。



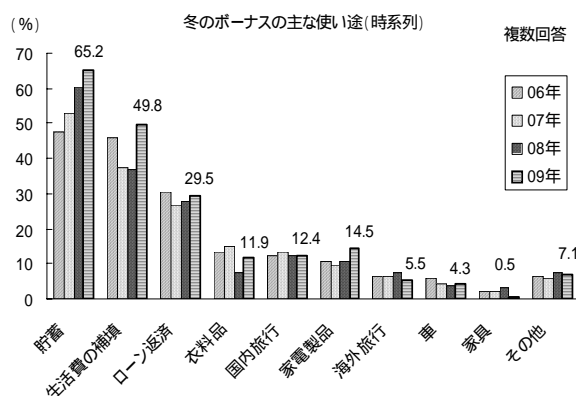
[今後の支出意向]

- ・ 今後の支出意向をみると、D I 値がマイナスとなった15費目のうち、8費目で前回は下回るなど、支出抑制傾向はさらに強まる見通しである。中でも、「通信費」や「水道・光熱費」のD I 値は前回は10ポイント以上下回った。家計を今一度見直し、さらにスリム化を図ろうとする消費者の姿勢がうかがえる結果となった。
- ・ 一方、「旅行」「教養・趣味・娯楽」「教育費」の3費目はD I 値がプラスとなっており、いずれも前回は比べ大幅に改善している。こうしたレジャーやカルチャーへの消費意欲は持ちながらも、実際にはこれらへの支出は減らされる傾向にあり、理想と現実のギャップを感じさせる結果となった。



3. ボーナスの使いみち

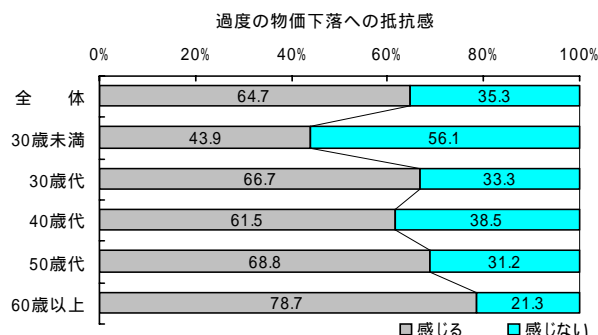
- ・冬のボーナスの使いみちで最も多かったのは「貯蓄」(65.2%)、次いで「生活費の補てん」(49.8%)となった。
- ・いずれも、ボーナス用途の調査を始めた03年以降最も高い水準であり、消費者の生活防衛意識が色濃く反映された結果と言える。
- ・エコポイント制度の効果もあってか、「家電製品」(14.5%)は03年以降で最も高い水準となった。



4. 物価 - デフレの進行 -

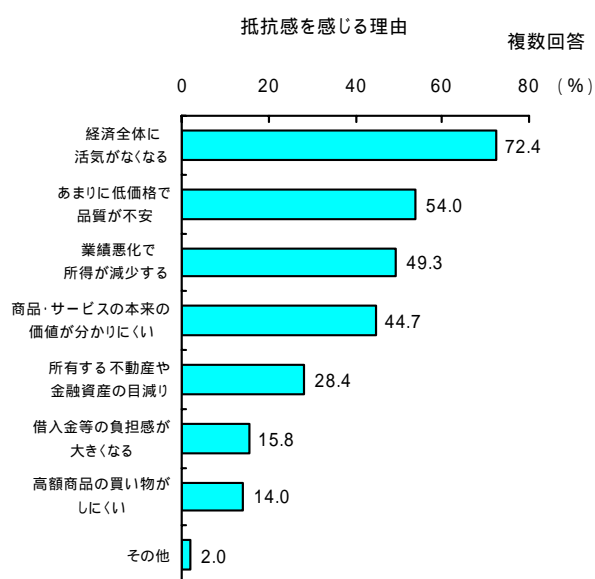
[過度の物価下落への抵抗感]

- ・過度の物価下落に対して抵抗を「感じる」という人は、64.7%に達した。
- ・年齢別にみると、30歳未満では「感じる」との回答が43.9%と半数に満たないが、60歳以上では78.7%と、年齢が高くなるほど過度の物価下落を不安視する人が多い。中高年層は景気の高や谷を何度も経験し、デフレの悪影響を認識していると思われる。



[抵抗を感じる理由]

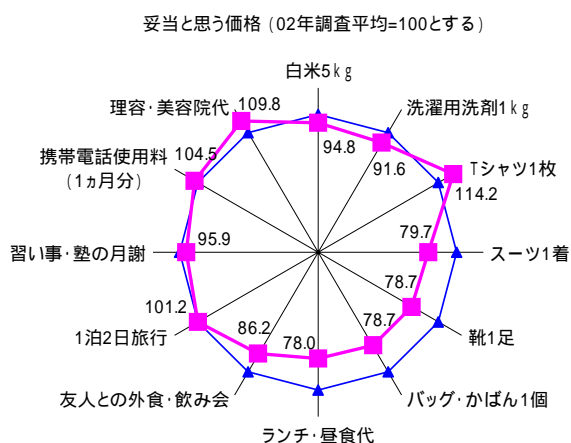
- ・過度の物価下落に抵抗を感じる理由で、最も多かったのは「経済全体に活気がなくなる」(72.4%)、次いで「あまりに低価格で品質が不安」(54.0%)、「業績悪化で所得が減少する」(49.3%)となった。
- ・消費者は、所得が増えない中で低価格化を歓迎しながらも、価格下落がなおも続けば企業業績が悪化し、所得減少という形で跳ね返ってくる、いわゆる“デフレスパイラル”を懸念しているようだ。
- ・また、低価格化は商品やサービスそのものの価値、品質に対する不信感につながりかねず、その点でも消費者は抵抗感を感じているようだ。



5. 価格の相場観

- ・デフレが進行する中、主要な品目について消費者が妥当と思う価格を尋ねたところ、02年（前回調査）と比べて、12品目中8品目で下落した。
- ・特に、「スーツ」「靴」「バッグ・かばん」といった衣料品・身の回り品や、「ランチ・昼食代」「友人との外食・飲み会」等の外食費は大幅に下落した。消費者の節約志向と、それを受けた供給側の低価格戦略によって、相場下落が確認できる結果となった。

- ・一方、「理容・美容院代」や「Tシャツ」の相場は1割程度上がっている。若年層を中心に、男性が理容室から美容室へシフトしたり、高額な衣料品を我慢して、軽衣料（Tシャツなど）を多少奮発するなど、節約する中でも自分なりのぜいたくやおしゃれを楽しむ消費者の姿が垣間見える結果となった。
- ・安売りが常態化する中で、消費者が納得する価格も下落しており、小売業者の採算悪化が懸念される。



妥当と思う価格

(単位:円)

	2002年調査	2009年調査
白米5kg	1,986	1,883
洗濯用洗剤1kg	395	362
Tシャツ1枚	1,436	1,640
スーツ1着	30,349	24,197
靴1足	9,632	7,577
バッグ・かばん1個	13,328	10,483
ランチ・昼食代	1,032	805
友人との外食・飲み会	4,513	3,892
1泊2日旅行	21,879	22,142
習い事・塾の月謝	9,642	9,250
携帯電話使用料(1ヵ月分)	5,902	6,170
理容・美容院代	5,364	5,892

全回答を単純平均した値

まとめ

今回の調査では、政府による昨年6月の“景気底打ち宣言”以降、エコポイント制度などの消費刺激策の効果もあってか、消費者の景況感は改善傾向にあるようだ。しかし、所得環境はより一層厳しくなるとみており、生活防衛色はさらに強まる傾向にある。そのため、選択的消費に関わる費目については、今後も低調な推移が続くと予想される。实体经济の回復による可処分所得の増加なくしては、低迷する個人消費の持ち直しは期待できないと思われる。

(河野 静香)